

実践発表 No.1 (前半・room1)

高校生向けの日本語支援の取り組み
—NPO と神奈川県教育委員会との協働事業—発表者氏名 高橋清樹、武一美 (認定 NPO 法人多文化共生教育ネットワークかながわ)
志村ゆかり (一橋大学)

1. 実践の場の背景と特徴

本実践は、「横浜北東・川崎地域の県立高等学校生徒または入学予定者に対して、地域人材を活用し、外国につながるのある生徒への日本語指導を中心とした、入学から卒業までのトータルな支援を行う」目的で、県立川崎高校を会場に土曜日や休業中に日本語学習支援教室の形態をとり、認定 NPO 法人多文化共生教育ネットワークかながわ (以下 ME-net) が神奈川県教育委員会高校教育課 (以下県教委) の委託を受け、2020 年度から実施している。

ME-net と県教委は、高校への多文化教育コーディネーター派遣事業など、様々な協働事業として展開してきている。高校生の中退防止やキャリア支援など様々な課題がある中、高校生に対し、地域を巻き込んだ何らかの支援の場が必要であるとの共通認識の基、本実践の実現に至った。

本実践の特徴は次の通りである。①会場が県立高校である。②対象生徒が広域 (県立高校 41 校) である。③年間 57 日 (1 日 2 時間×2 コマ) 実施すること。④3 月に高校入学前の生徒を対象としたプレスクール (10 日間) を実施する。⑤拠点校 4 校に日本語指導員を県教委が雇用し、日本語指導員は高校内での日本語支援と本実践の場での支援をつなぐ役割を担っている。

2. 実践の枠組み

日本語指導は、日本語スタッフ 5 名が担当し、そのリーダーが志村ゆかりである。5 名はいずれも日本語教師の資格を有し、指導経験も豊富である。また、教科指導やキャリア支援は大学生や社会人ボランティアが担当し、高橋清樹がリーダーである。母語支援スタッフは、高校生の母語に対応するため、毎回 2～4 名参加、母語は中国語、タガログ語、ネパール語。大学生は、慶応大学との連携において、塩原ゼミの学生が毎回 3～6 名程度参加している。また、外国につながるのある大学生や社会人も母語サポーターとして毎回 2～5 名程度参加している。

日本語指導員は、隔週土曜日に参加している。通常は各高校で生徒の学校生活全般について指導し、日本語指導、教科指導、進路相談が必要な生徒の土曜教室への参加を促している。

3. 実践の内容と目標

本実践における日本語指導の目標は「各参加生徒が自身のライフコースをデザインしながら、その実現に向けて日本語力を育成、伸長していく」ことである。また、この個々の生徒の目標の実現を鑑み、全生徒共通の目標として「教科につなぐ」「(日本) 社会につなぐ」ということが挙げられる。指導の方法と特徴、および目的を以下に紹介する。

『中学生のにほんご』(日本語総合教科書) を日本語学習の軸として、書く力、話す力を伸ばし、アカデミックライティング、シンキングにつなげる。

- ・生徒の学びの個別性 (学習速度、得手不得手の違い等) に対応するため個別に学習を進める。
- ・日本語スタッフによる担当制導入

☞各担当生徒の学習状況をみながら、大学生、日本語指導員に、教材に沿った会話、自由会話、

作文へのコメントや意見交換等を依頼。担当生徒の進度を見て生徒同士の交流も適宜実施。

☞作文指導は専門家として日本語スタッフが担当。なお、作文力を育成するために大学生等との意見交換や情報収集、生徒間での作文の共有および話題の共有を重視している。(いわゆる4つのCを念頭に指導にあたっている。)

☞日本語学習から教科学習への移行は、教科リーダー、日本語リーダー、担当の日本語スタッフおよび当該生徒と相談し決定

最後に、(対象) 高校への入学前に実施するプレスクールについてであるが、プレスクールでは「仲間づくり」「高校生活」「自分を見つめる」「将来をイメージする」「教科学習体験」「先輩(ロールモデル)との交流」といったキーワードで実践を行っている。

4. 実践の様子

(1) 教室の日程

- 9:30 【支援者集合】 本日の活動の確認、新規相談・見学者等の確認等
- 10:00~12:00 【午前教室】 日本語グループと教科学習グループ(最後10分は振り返り)
- 12:00~13:00 【昼食休憩】 必要に応じ、生徒との相談
- 13:00~15:00 【午後教室】 日本語グループと教科学習グループ(最後10分は振り返り)
- 15:00~15:30 【振り返り】 本日の活動の振り返り、次回に向けての確認事項や検討事項

(2) 2021年度(4月~1月)参加者数(延べ)

実施回数	高校生	日本語等 スタッフ	母語支援 スタッフ	日本語 指導員	大学生・社会人	
					外国ルーツ	日本
68回(34日)	802名	364名	130名	120名	218名	196名
1回当たり	11.8名	5.4名	1.9名	1.8名	3.2名	2.9名

※高校生の参加は対象校41校のうち8校からの参加。母語は、多い順に中国語、ネパール語、タガログ語、スペイン語、モンゴル語、ミャンマー語など。

5. 実践の考察及び課題

本実践は、外国につながる高校生の入学から卒業までを支える教育コミュニティ構築の試みである。この教育コミュニティは、多様な人的リソースの配置によって実現される。すなわち、教員と共に高校内で生徒を支える「日本語指導員」(教育委員会雇用)が本実践の場と高校との繋ぎとなり、本実践の場においてはNPO法人のメンバーである「日本語スタッフ」「母語支援スタッフ」「大学生ボランティア」「社会人ボランティア」「大学生母語サポーター」など、それぞれの個人が有する資源を用いて生徒個々のライフコースを見据えた日本語学習・教科学習・母語支援・語り合い・進路情報の提供・相談などを、同時進行で行っている。本実践における高校生への日本語指導は、こういった豊かで緩やかな教育コミュニティの文脈の中にあり、「日本語スタッフ」は日本語を教えるだけの存在ではない。本実践は高校生のライフコースの中にある日本語という視点をもっているが、そのライフコースの中に彼らの母語をどう位置付けていくのかも重要な教育的課題であると認識している。

【引用文献】スリーエーネットワーク(2019)『中学生のにはほんご 学校生活編・社会生活編』庵功雄監修 志村ゆかり編著